

第3回「愛猿記賞」(エッセイ部門)【佳作】

「鍋蓋を磨く」

北海道 葛西 庸三

ヘルパーさんが作ってくれた料理をいただき、茶碗や鍋を洗う。

今回使用した鍋は、金色のアルミ製で、直径十四センチほどの大きさのものだ。

妻の二三子が、生前とても重宝にしている、永年に亘って使っていた。

鍋蓋をよく見ると、二重になっている縁が濃い金色になっていた。ずっと使っているうちに、煮物の汁が溢れ出て、染みたものだ。

よし、磨こう、と思う。

ナイロンタワシに磨き粉をふりかけて始める。時間が経つにつれ、少しずつ汚れが落ちていく。半端で止める訳にはいかない。

どのくらい時間が経ったのか。やっと、蓋の周りがきれいな金色に甦った。

ほっとして眺めていると、この鍋で料理していた二三子の姿が睨に浮かんでくる。

春になると、毎年のように二人で近くの崖下の堤防へ行った。

澄んだ川水の流れに添って生えているフキや、ウド、ワラビ、タランボの芽などを採った。

持ち帰ったら直ぐ、二三子は金色のアルミ鍋で山菜を茹でた。そして料理をする。

夕食の小卓に、煮物やテンプラになった山菜料理が沢山並ぶ。

春の香りが部屋一杯に広がる。おいしいのである。生きる喜びを噛み締めながら、二人で至福の一時を過ごすのであった。

磨いて綺麗になった鍋蓋を見てみると、二三子との生活が甦ってくる。

一緒に暮らして五十六年。私は自分勝手だった。苦勞のかけっぱなしだった、と思う。

現職の時は、仕事の関係でよく人を招いた。

「あした、誰と誰を呼ぶから」と言うと「わかった」と二三子は返事をして、接待の準備をする。材料を揃え、時間をかけて、何種類もの料理を作った。

そんな時、いつも使用していたのがこの金色のアルミ鍋であった。

来客は皆、「奥さんの料理は最高です」と帰って行く。お蔭で、職場の人間関係がうまくいき、仕事の上で随分助かった。

口下手な私は、心の中では精一杯感謝していながら、面と向かって素直に、有り難うが言えないのだった。

二三子は、「皆さんが喜んでくれるのが、一番よ。よかった」と笑顔で始末をした。

一人暮らしになって五年が経った。最近は毎日が平凡すぎて、二三子への思いが薄れて行くような気がしている。

そんな時、食器や鍋を洗っていると、ふと、激しく二三子を思い出すことがある。

苦労かけたなあ、すまなかった、という感謝と悔いの気持ちだが、もくもくと湧き出てくる。その思いは、死ぬまで続くことだろう。